

## 4. 弟子の使命（ヨハネ 6：1～14）

これは、「五千人の給食」と呼ばれる出来事。イエスは、この奇跡を通して、弟子たちに託されるべき使命について教えた。この箇所のほか、マタイ 14：13～21、マルコ 6：30～45、ルカ 9：10～17 に、この出来事に関する記事がある。四つの福音書の記事を総合し、さらに聖書の他の箇所も合わせて見ると、弟子の使命は、つぎのとおり、4つある。

## (1) 羊に食物を与える（ここでは肉体に必要な食べ物、のちには霊的な食べ物）

マルコ 6：34 イエスは舟から上がって、大勢の群衆をご覧になった。彼らが羊飼いのいない羊の群れのようにであったので、イエスは彼らを深くあわれみ、多くのことを教え始められた。

ルカ 9：13 すると、イエスは彼らに言われた。「あなたがたが、あの人たちに食べる物をあげなさい。」・・・羊に食べ物を与えるのは、弟子の使命

ヨハネ 6：5～9・・・ピリポの計算、アンデレの判断  
弟子たちの人間的な力ではできないし、またそうすべきでない

マタイ 14：19 そして、群衆に草の上に座るように命じられた。それからイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて神をほめたたえ、パンを裂いて弟子たちにお与えになったので、弟子たちは群衆に配った。

・・・必要な食物はイエスから弟子たちに供給される。それを群衆に与えるのは、弟子たちの役割である。

## (2) 父なる神について学び、それを人々に教える（ヨハネ 14～16 章）

## (3) 世に遣わされて、福音を宣べ伝える者となる

ヨハネ 17：18 あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました。

## (4) 弟子をつくる（マタイ 28：18～20）

【福音を宣べ伝える→父・子・聖霊の御名によって洗礼を受ける→イエスの命令について教える】 = 弟子とする

## 5. キリストの裁きへの備え（2つの説明責任）

### (1) 自分に委ねられている物質的財産についての説明責任

不正な管理人のたとえ話（ルカ 16：1～13）

信者は、自分の物質的財産について、忠実でなければならない。よって、その説明を求められる時が来る。

弟子になるとき、信者は献身する。そのとき、自分の物質的財産もすべて、自発的に喜んで、キリストに差し出し、キリストのものとする。そのうえで、キリストから預かって、その使いみちを委ねられる。

したがって、弟子は、自分に委託された物質的財産をどのように使ったのか、キリストの裁きの座で説明責任を負う。

### (2) 自分に与えられている霊的賜物についての説明責任

ある身分の高い人についてのたとえ話（ルカ 19：11～27）

信者は全員、信じたときに、聖霊の賜物を与えられている。

弟子は、自分に与えられている霊的賜物を見出して用いたかどうか、それを正しく用いたかどうか、そして、教会を建て上げるために用いたかどうかについて、キリストの裁きの座において説明責任を負う。

このたとえ話から分かるのは、信者は自分に与えられている霊的賜物をどのように用いたかどうかによって、将来受ける報奨が決まると、いうことである。

その報奨とは、メシアの王国におけるその者の権威のランクである。この世で弟子としての働きを成し遂げるなら、この世では辱しめや拒絶を受けるとしても、王国が建つときに、私たちには、良き敬意が払われるであろう。

## 不正な管理人のたとえ話（ルカ 16：1～13）

## □文脈の確認

1. 前後と合わせてのひと固まりは、**ルカ 15：1～17：10**。このひと固まりの中で何が書かれているのか、そのつながりの中で「不正な管理人のたとえ話」も理解される。
2. 15：1～2・・・登場人物と場面設定。**取税人たちや罪人たち（遊女たち）がみな**、話を聞こうとしてイエスに近くにやって来た。すると、**パリサイ人たち、律法学者たち**が、「この人は罪人たちを受け入れて、一緒に食事をしている」と文句を言った。かなりの数
3. 15：3～32・・・イエスは、**文句を言ったパリサイ人たち、律法学者たちに対して、たとえ話を3つ**語った。たとえ話のポイントは、**神が罪人たちをどのように見ておられるのか**。この中で、罪人、パリサイ人、神、それぞれが登場する。
  - (1) 第一のたとえ話・・・いなくなった一匹の羊が罪人。九十九匹がパリサイ人。一匹を捜し出す人は、子なる神（メシア、イエス）。
  - (2) 第二のたとえ話・・・なくなった1枚の銀貨が罪人。明かりをつけて家を掃き、注意深く捜す女の人は、聖霊なる神。
  - (3) 第三のたとえ話・・・弟息子が罪人、兄息子がパリサイ人。弟息子を赦し、再び子として迎える父親は、父なる神。
4. 16：1～13・・・次にイエスは、「**不正な管理人のたとえ話**」を語る。この話は、パリサイ人たちや律法学者たちだけでなく、「**弟子たちにも**」（16：1）、語られた。取税人たちや遊女たちも聞いている。テーマは、**財産の扱い方**
  - (1) 背景・・・イエスがこのたとえ話をした背景には、当時の誤った常識を正す必要があった。【**金持ちは神からの祝福を受けている人である**】という常識。富は神の祝福の結果であり、富む人は神から祝福された人である、という考え方。パリサイ派の言い伝えの中にも、次のような教えがあった。「**神の栄光は、賢い人、強い人、富む人、背の高い人の上にとどまる**」
  - (2) このたとえ話の結論部分（13節）・・・「**どんなしもべも二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛することになるか、一方を重んじて他方を軽んじることになります。あなたがたは、神と富とに仕えることはできません。**」

5. 16:14~31・・・再び、**パリサイ人たちに対して**

- (1) 3つのたとえ話と不正な管理人のたとえ話、合わせて4つのたとえ話すべてを聞きながら、パリサイ人たちは、イエスをあざ笑っていた。彼らにとっては、罪人は切り捨てる対象であり、富むことは神に祝福されていることの証しだからであった。ここで、イエスは再び、**パリサイ人たちに対して**語った。
- (2) 14~18節・・・パリサイ人たちは自分たちを正しいとするが、神は彼らの心をご存じである。パリサイ人たちは律法を守るために言い伝えに従えと教えるが、実のところ、彼らが教える言い伝えは、こうすれば律法違反にならないという**抜け道**を教えるものでもあった。その代表例が離婚。そのため、言い伝えに従って離婚が横行し、多くの婦人たちが遊女に墮ちる原因となっていた。
- (3) 19~31節・・・「**金持ちと貧しい人ラザロ**」の実話
- ① 金持ちは死んでその靈魂は、よみで苦しんでいる。貧しい人ラザロは死んでその靈魂は、同じよみの中でも、「アブラハムのふところ」と呼ばれる場所で慰められている。
  - ② この状況は、**パリサイ人の教えとは逆**。
  - ③ **この話の結論は、『モーセの律法と預言者(=旧約聖書)の教えに耳を傾けよ』**すなわち、パリサイ人たちが作った言い伝えではなく、神のことばである聖書そのものに向け、ということ。

## 6. 17:1~10・・・結びのことば。弟子たちへの教え。「これらの小さい者たち(=信仰的にまだ幼く弱い信者、ここでは取税人たちや遊女たちを指す)をつまづかせるな」

## □不正な管理人のたとえ話(ルカ16:1~13)

1. 前のたとえ話とのつながり・・・3つのたとえ話の3番目、放蕩息子のたとえ話では、弟息子は、父親から分けてもらった財産を放蕩して使い果たしてしまった。他方、兄息子はそのような放蕩はしていない。では、財産をどのように扱うべきものか。ここで、イエスは、4つ目のたとえ話をした。ここでは、イエスは、パリサイ人たちや律法学者たちに対してだけでなく、弟子たち、そして弟子たちとともにいる取税人たちや遊女たちに対しても、語った。
2. 1~2節 ある**金持ち**に一人の**管理人**がいた。この**管理人**が**主人の財産**を無駄遣いしている、という訴えが主人にあった。主人は彼を呼んで言った。「おまえについて聞いたこの話は何なのか。会計の報告を出しなさい。もうおまえに、**管理**を任せておくわけにはいかない。」

- (1) このたとえ話の登場人物は、ある金持ちと一人の管理人である。
    - ① 管理人は、主人の財産を任されて、その運用と管理をする。貸金業、種の貸付（作物による回収）、貸地（小作料の徴収）、開墾による農地の開発、開発者への融資など運用取引項目は多岐にわたる。
    - ② 管理人は、単なる会計係ではない。主人を出資者とすれば、管理人は経営者という方がよいかもしれない。管理人の裁量の幅は広がったからである。特に主人が政治や軍事に従事するような貴族の場合、貸金業などに直接関与することは差し控えて、管理人にすべてを任せることが一般的であった。
    - ③ 管理人は、奴隷の身分である場合もあるが、このたとえ話では、奴隷ではなく、契約関係によるものであろう。
  - (2) このたとえ話の中では、管理人は、忠実にその義務を果たしていなかったようである。周囲のある人が、主人に、「あなたの管理人は、あなたの財産を無駄遣いしている」と伝えた。
  - (3) 主人は、管理人を呼んで、会計報告を出すように命じ、解任する予定であることも通告した。
3. 3～4節 **管理人は心の中で考えた。「どうしよう。主人は私から管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力はないし、物乞いをするのは恥ずかしい。分かった、どうしよう。管理の仕事をやめさせられても、人々が私を家に迎えてくれるようにすればよいのだ。」**
- (1) 管理人は、管理の仕事を取り上げられることを覚悟した。
  - (2) しかし、何かほかの仕事をできるわけではない。どうしたらよいか、残された時間はわずかである。彼は、仕事を失ったあとの方策を考えた。「人々が私を家に迎えてくれるようにする」とは、誰かに恩を売って、後日、その相手から管理人の仕事を受けられるようにしよう、という意味である。
4. 5～7節 **そこで彼は、主人の債務者たちを一人ひとり呼んで、最初の人に、「私の主人に、いくら借りがありますか」と言った。その人は「油 100 バテ」と答えた。すると彼は、「あなたの証文を受け取り、座ってすぐに 50 と書きなさい」と言った。それから別のの人に、「あなたは、いくら借りがありますか」と言うと、その人は「小麦 100 コル」と答えた。彼は、「あなたの証文を受け取り、80 と書きなさい」と言った。**
- (1) その方策とは、債務者たちを呼んで、彼らの債務の一部を免除してやることであった。

(2) 債務者との交渉は管理人の権限の範囲内であり、債務の一部カットは、債務者にとってはありがたいことである。債務者たちの側には何の疑念も、異論もない。寛大な扱いをしてもらった債務者たちは喜び、管理人に恩義を感じたことであろう。そして、管理人がその仕事を失ったと聞けば、彼を家に呼んで食事に招いたり管理系の仕事を頼んだりして、恩を返すであろう。

5. 8節 主人は、不正な管理人が賢く行動したのをほめた。この世の子らは、自分と同じ時代の人々の扱いについては、光の子らよりも賢いのである。

(1) 主人は、彼が「賢く行動した」とほめた。何が「賢い」のか、それは、お金で友をつくったことである。しかし、自分のお金ではなく、主人の財産を使ったわけであるから、9節「不正の富で自分のために友をつくった」ことになる。

(2) 「この世の子らは、自分と同じ時代の人々の扱いについては、光の子らよりも賢い」。

① 「光の子ら」とは信者である。「この世の子ら」とは不信者である。

② 「自分と同じ時代の人々の扱いについては」・・・二重線部分は日本語訳で意味をわかりやすくしようとして、あえて加筆された箇所である。本当は、加筆がない方がよい。原文は単純に「自分たちの時代においては」である。自分たちが人生を過ごす期間においては、という意味である。

③ 自分たちが人生を過ごす期間について、私たちは自分で備えるべきことはきちんとしないとイケない。その点では、信者よりも不信者の方が賢いというのは確かである。信者の中には、「神が守ってくださるから、保険はいらない」と言って、保険に加入しない人もいるが、保険や年金などの経済的備えは必要である。(参考： 献金の計画的準備 II コリ 9:5)

6. 9節 わたしはあなたがたに言います。不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうすれば、富がなくなったとき、彼らがあなたがたを永遠の住まいに迎えてくれます。

(1) わたしはあなたがたに言います。・・・ここでイエスは、パリサイ人たちと弟子たち、そして取税人たちと遊女たち、このたとえ話を聞いている「あなたがた」に、言う。

(2) 不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうすれば、富がなくなったとき、彼らがあなたがたを永遠の住まいに迎えてくれます。

① 管理人がしたように、自分のために友をつくりなさい。

② 不正の富で・・・

- このことばで、まず反応するのは、取税人たちと遊女たちである。彼らは、「自分たちの持っている財産は、不正な富だ」と自覚している。取税人は、決められた以上のものを取り立てて自分の取り分を膨らませていた。遊女は言うまでもなく、人には言えない稼業である。
  - 自分たちの富は正当なもの、とあざ笑うのはパリサイ人たち。しかし、金持ちの多くは、金を貸して利息を受け、畑を買い増してますます裕福になっていく。しかしモーセの律法は同胞から利息を取ることも、割り当て地の所有権を移転させることも禁じていた。パリサイ人の言い伝えはその抜け道を提供して、イスラエルの中に貧富の格差を拡大してきた。彼らの富もまたイエスの目から見れば、「不正の富」であった。
- ③ **富がなくなったとき**・・・「富」とは、物質的財産一般を指す。その富がなくなるときとは、人が物質的世界から離れるとき、すなわち、肉体の死の時である。
- ④ **彼らが**・・・不正の富でつくった友たちが
- ⑤ **永遠の住まいに迎えてくれます**・・・永遠の住まいとは、信者の行先、天である。天で友たちが迎えてくれる。
- (3) 9節でイエスが命じているのは、次のような内容である。
- ① 不正の富で、信仰の友をつくりなさい。つまり、これまで自分のために蓄えたその財産を使って、これからは宣教活動をしたり宣教団体に献金したりして、人を救いに導く働きに参画しなさい。
- ② その救われた人の中には、あなたよりも先に死んで天に行く人もいるでしょう。
- ③ あなたが死んで、あなたの霊魂が天に行くとき、その人たちが迎えてくれることでしょう。
- (4) 現代の私たちへの適用：「**不正の富で自分のために友をつくりなさい**」とは、地上の物質的財産を宣教活動などに使うことや献金することの勧めである。
7. 10～11節 **最も小さなことに忠実な人は、大きなことにも忠実であり、最も小さなことに不忠実な人は、大きなことにも不忠実です。ですから、あなたがたが不正の富に忠実でなければ、だれがあなたがたに、まことの富を任せるでしょうか。**
- (1) 「**もっとも小さいこと**」「**不正の富**」・・・地上の物質的財産
- (2) 「**大きいこと**」「**まことの富**」・・・罪人を悔い改めさせ、永遠のいのちを受けさせる霊的な富。罪人に救いを受けさせる福音
- (3) 信者は、地上の物質的財産を忠実に扱わねばならない。不正な管理人のように「**無駄使いして**」(16:1)は、ならない。地上の物質的財産を正しく用いることができるなら、霊的な富を任され、人々を救いに導いて信仰の友とすることができる。

8. 12節 **また、他人のものに忠実でなければ、だれがあなたがたに、あなたがた自身のものを持たせるでしょうか。**
- (1) 「**他人のもの**」・・・地上の物質的富で他人のもの
  - (2) 「**あなたがた自身のもの**」・・・霊的な富、イエスから信者が受け取って人々に与えるべき霊的な富
  - (3) あなたがたが他人の富を管理する責任を負ったときは、忠実にそれを遂行しなさい。そうすれば、彼らはあなたがたを信用し、あなたがたが彼らに与えようとする霊的な富を受け取って、あなたがたと共有することができるようになる。
9. 13節 **どんなしもべも二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛することになるか、一方を重んじて他方を軽んじることになります。あなたがたは、神と富とに仕えることはできません。**
- (1) ここでイエスは、パリサイ的な理解から脱却するように迫る。富むことイコール神に祝福されていること、ではない。神に仕えるか、富に仕えるか、どちらかである。
  - (2) 地上の物質的財産は、信者が地上での生活を送る上で必要であり、将来のために賢く経済的備えをすることも必要である。さらに、物質的財産を宣教に用いて信仰の友をつくることも弟子の任務である。しかし、バランスが大切である。富に拠り頼んではいけない。富の奴隷となってはいけない。
  - (3) パリサイ人は神に従うといいながら、実のところ、「**金銭を好む**」(16:14)という傾向に陥っていた。神に仕えるのか、富に仕えるのか、明確に選択をしなければならぬ。
  - (4) 「愛する」「憎む」は、感情的な好き嫌いではなく、どちらかを選ぶ・選ばない、の選択の意味で用いることがある。ここはその選択の意味である。
  - (5) 弟子が地上の物質的富との関係において覚えておくべき原則は、次である。

マタイ 6:33 **まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。**

□後日の展開

不正な管理人のたとえ話の教えは、二人の金持ちへとつながる

青年(役人) ルカ 18:18~27 富をささげることができなかった

取税人ザアカイ ルカ 19:1~10 まさに不正の富で友をつくった実例